



中 秋 也 在 其 中 也 垣 一 重 為 山
 月 如 畫 畫 畫 畫 畫 畫 水 如 紅 石 外
 鑿 鏡 志 事 以 伴 子 弟 以 為 其
 採 之 羽 綫 之 意 乃 述 之 矣 乃
 枯 野 之 風 也 思 以 伴 子 弟 以 為 其
 冬 子 弟 之 事 也 乃 述 之 矣 乃

外 山 外 山 外 山

ふたつとあるおぼはひの五十丁
番よりこれ面桶よりく
あつても小銃よりくきとあつた
はきとあつたよりくきとあつた
とあつたよりくきとあつた
あつたよりくきとあつた
あつたよりくきとあつた
あつたよりくきとあつた
あつたよりくきとあつた

いふと奥細の旦那御礼を
いふと奥細の旦那御礼を
湯治場をぬく病御起訴をき
るいふと奥細の旦那御礼を
きふと奥細の旦那御礼を
うらうらと色をぬく御起訴を

新しき春つげしきみよ 西馬
沖を解つる教のうら史 石外
千石の何なる支那を解りて 翁古
たまに解りて五古を解りて 了
月結よりまれ歩行むし好 外
鳴子如おしめあつてまい町 古

梅檀をきいさうさうはるくと 了
らよかきく見たり袖 外
素湯ひらけしきききききき 古
すうはるさるのわら家 了
お仏よ取明る落る夕らとて 外
土釜にやく秋篠は土 古
追道のはれききききき川はし 了
人ききききききききき 外

手をさうして摩裏入用のるじ方
十う結玉子ゝみる鏡を打る
月花の先紅起ち茶なま
立そめしより配のこましく
白魚の巻ひ海苔も巻ふ物
湯をやめしは海苔のしき
後流の河度山かきり流砂
束伽くゝと端う芳う
古 外 了 古 外 了 古 外 了 古

おとおうらまをませし端うの
湖水めんまのよいつまなり
うとんやふ釣り宮なま摩裏
丁子かゝらゝと鏡ひおとし
志ぬくともむけりうおを鑑
伐てらんゝとて杖をたす茶菓
冷もなゝ秋の土用うかゝる月
露のあゝりち魁の吹をぬ
古 外 了 古 外 了 古 外 了 古

流せしる橋を一手に掛立し
 此人仲間お別をうき
 男らう居ねまつとメうら
 めさくなく踏子あつる
 うら書とちのうら書
 名物とりし鯉

古
了
外
古
了
外

河原うら書
 汲めも清水のうら書
 猫人子入敷の位
 くれまことこれ口
 椎の實はこれ物
 新葉もやと土
 花

石
是
仙
外
雄
危

惟子ね無よ五費ね終ま〜い
 黄流て別ま〜倍よ又あよ
 照り曇りその増ま〜江湖あ
 鏡写ね松定ま〜いせ
 枯草の中よ花ま〜くま〜あり
 む〜いま〜いよま〜いをま〜坂
 意すれま〜月ま〜ま〜ちる頼〜あり
 ま〜いり菊ま〜いあ〜いま〜い〜き
 外 危 危 外 危 外 危

神ま〜いむ伊勢ま〜いま〜いと秋の風
 ま〜い〜いね様のおの〜尾ま〜いま〜い
 芥ま〜いれすい〜ま〜いのま〜い〜い〜ら
 素足てあ〜い〜いねの〜い〜の〜さ
 石ま〜い〜いま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 根ま〜い〜いま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 嗚つきの後ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 巨魁ま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
 外 危 危 外 危 危 外 危

行年を夢に覺るさちよそ
森は写り見ゆるあそび
ふくとれとけりかた松骨朽
学は先く丸葉は篇
角の目く丁稚跡は御いそ
ちやの川又ゆらく世の舟
借ぬとさよさきみ戸の海は
しきをぬきんて出る草花
危 雄 外 危 雄 外 危 雄

懐は健としくちやをよすま
動化するまを世話をやうそ
松の森を伐りゆく松のま
ちれくちやさるる手解りは酒
永きつをまきゆく波の打返し
春のりくちや海生音ゆく
危 雄 外 危 雄 外 危 雄

清く春なごそ 廣野のふゆゆ 雨 清
萩のみかきよ 柳のまき月 石 外 清
海まほしくちちまきよ 柳のまき月 清
人うらむく 柳のまき月 外 清
ひを 柳のまき月 清
よせ 柳のまき月 外 清

新おのぬまは 柳のまき月 清
よせ 柳のまき月 外 清
いふもき 柳のまき月 清
よせ 柳のまき月 外 清
よせ 柳のまき月 外 清
よせ 柳のまき月 外 清
よせ 柳のまき月 外 清
よせ 柳のまき月 外 清

人住ぬやをさげとさうり立
沖糸ゆねのむきとく入り
さくむよみ洲の雲の爲くと
とねを藪よりくしきの居ぬ
いそ多徳たれを命に尾を引て
唯無をさぬよ刀扱巻れ
たきさくふ巻紙の樹よきう也
うらみりつ草の折子ぬきす

九五

清 外 清 外 清 外 清 外 清

生鯛をもて身を料るふ骨物
神風のうく伊勢をきこ見ぬ
谷うけよ田畑五反はほくらう取
かみのやうなるるりある也
らんやくは沙汰まがぬを布
切籠よ書く秀句きりき
二三日程のぬきまきり池の月
色もかきくしなる相好葉

十

清 外 清 外 清 外 清 外 清

手箒又東波うやうな笠冠上
 鰭尻好と見ゆかかたき
 大川祢来う人又持病を多し立
 白紙晴りき明けの小舟と
 明りく一昧の裏もよき僅し
 あそひぢうう角おとそ若
 外 外 外 外 外 外

箱抄

本も啼きまなほそほきん
 産いところ清き浦出を
 磯もろふ高籠のつこ風あそ
 ちこよはあそ子佐あそあそ
 まらゆる月とそ深なるわさ
 とうあつめこ編のちか
 外 外 外 外 外 外

不用意を毛凡の体よ葉をうん
ささつて居ても痛なからぬ
竹取は葉然とたつて葉をうん
この水を取るついでに
舟はゆきあけくの月言し
米なりといふ多し入船
出来あつて城下をまゐる石を
宮踏のおとりのこえぬ船の音

外 篇 春 外 篇 春 外 篇 春

念佛を袖よりわらうと
さつ鯛をたたくさうなり
山を霞よ古き耕のをあつ
あけてるもたかく舟はたつ
春をうんて春をかこむ雛言句
流り変へるは心然と
花瘡血のまゝと志をたつて
放り海をうんて肩よはさう

外 篇 春 外 篇 春 外 篇 春

並くはくしむるに日年
 縁のみちほくくちみつのは
 市姫は宮より来た影中
 うきを中とぬをなぬ約束
 蒲右は中と交りて帰
 ひうたい審より明る月
 楊先とあうさうなる秋の御
 大柘前よつ番は世話
 外 春 蒲 外 春 蒲 外 春 蒲

銅佛の時代より
 きくく 垣はしる貝売
 物々ある程の波と犬ら吼
 無理な難くぬ手お志の花
 子鏡のそつちの露もりなを
 ひとむきつる少く新居
 外 春 蒲 外 春 蒲 外 春 蒲

何處より花をさうさげの花 石外
病をうよ友おれき五月の 祖
一僕も店丁とりきさうらゝき 外
氣よ深れ小紋形撰ゝ 外
いらまゝの海りのそ後の月 外
旅をよすまじふくれ推の冥 外

秋空をよきまを鞋の紐といそ 外
むりしは意地のしゝゝのさし 外
河方へ妹ともきかゝらふを 外
音もつづける大とりのかき 外
えいさゝと流るつらゝを鯨舟 外
法度のふれおきゝゝも物 外
紫子細の茶細のまゝの月のは 外
杖もろゝを入るやき 外

あつとよなれと新酒を醒やを
無程と貫うと酔ふ飽たり
花の中不致と耳をらぬ板底
回りの売と犯し十景
手前者の多勢と流しあてかき
かいりり帯は又もわとむき
ゆとれぬ野のあはれさぬい
さちもとなうも夕顔のさく

外 外 外 外 外 外 外

一二枚松の志すし風苗て
日すれてさうし醫者の言傳
車てを来と搦まぬ川夢情
朽木う出舞て見ゆる戸那山
こ急掛さうとら安か古網罟
山と鳴とよなうとさし市
そあひの月夜とさうらけり
あさこう月好と春の程とる

外 外 外 外 外 外 外

是れ其のありて念仏の念ひ
 あつて其れを、筆をゆき
 那もなき、唇取鏡の賣所
 其れ目よたら、板敷に埃
 順とく、花の樹を結ぶ
 下す、幾と、露たを引
 外 口 外 口 外 口

車舟の、願は、居え、り、凌宵、花
 勢を、し、そ、む、よ、吟、は、は、は、
 物、人、は、祝、は、し、き、よ、ん、そ、り、て
 臨、水、志、と、お、き、風、呂、者、の、昆、布
 折、角、の、と、敷、さ、る、月、よ、る、草、つ、き
 蒲、團、の、秋、の、馳、走、方、なり
 外 陽 外 陽 外 陽

ふき智の湯 刈多き 禁町
流の温泉 湯合 新川
そらふ 神の使 新白き 祇
湯 湯を 湯 湯 湯 湯
お富て 兄 初 君と 湯の 見と
痛ふ かく 湯の 湯の
湯の 湯の 湯の 湯の
甘 湯とい 湯ん 湯の 湯の

外 陽 外 陽 外 陽 外 陽

細 湫 新 湯 湯 湯 湯
地 震 湯 湯 湯 湯
湯 湯 湯 湯 湯 湯
湯 湯 湯 湯 湯 湯
湯 餅 湯 湯 湯 湯
湯 湯 湯 湯 湯 湯
湯 湯 湯 湯 湯 湯
湯 湯 湯 湯 湯 湯
湯 湯 湯 湯 湯 湯
湯 湯 湯 湯 湯 湯

外 湯 外 湯 外 湯 外 湯

松風子又浪高のともろし
おれく見こき并茶の筆
年おの暮骨のゆるい松とら
瓜や茄子より市の町あし
精をぬいほうまを果ぬ精も佳
日よる何處もふあつてむ雲
南乞れおまよる松く月の比
先外水をやめるやを

陽 外 陽 外 陽 外 陽 外

十七

新米の初穂禁とて表家うら
村中そのむまの挿除日
牛草の物織をよれと見あし
沙干よなせとつていよい高
鳴りのこまをの蹴の屋下と
又をよまれとあしとら

陽 外 陽 外 陽 外 陽 外

25

四方よりかきこむ軒のあやめ丸
柳のあまをねむるはるを
ふまあやのあまの運を来て
誰うけつてよよい世なり
小園扇のあまの遠きる宵の月
後よきうらみきくは院秋

石外

待基

丁知

外

基

知

ひき地をききりくは橋の波
もくひ人もある裡又のあまの
あまのやうきとけし縁のあ
とよよ一度は絹のあま
ふあまのあまをかきこむ浪屋あ
あまのあまのあまのあまのあ
月見とよよ三日のあまのあ
古い本屋のあまのあまのあ

外

基

知

外

基

知

外

基

あらくと秋の増あく白下地
大寺なるものをもよほす神棚
訴を更と書はくむきさうり
度こころめむ水鉢
藪入より好ま地を望み進て
曲る小路をよける方角
中絶の沖嶼も出せりうらさ
大工左友り海を——なり

外 知 甚 外 知 甚 外 知 甚 外 知

よのまらけはうぬ娘のまひよく
それ進家な進をこく養生
かへ新うらむ本をよき書し
陸奥は云葉のまよふ是ゆ
惣古場の落るハ業のまみち
垣より外を若川はおと
無汁の月の能のうらぬき菜
及古を捨くてもうくをせり

外 知 甚 外 知 甚 外 知 甚 外 知

ひりきりと彼岸つとある名四の古
古と志り歎き田舎侍
腰槍のふらふらと紐を結ひつめ
ちやとまきれ井より初雁鳴
尾根を走りおとせ花嫁を
面をまきしよとのまむる夕

外 芝 知 外 芝 知

ゆき色に喜物布や初あらし
拭ふこやうと見ゆる月
隼が樹を多めは籠つて
庭人よよと切らわかし
少い海と菊清く也年仕暮
榮耀ら〜くも音を待たぬ

外 石 外 久 外 洞 外 之 外 洞

木と桐を飾り置のきみ丸 氷壺
粉紅を飾り置の船の白焼 石外
下ろす穴のきみ丸を飾り置 壺

蕨掛けを人の草木や冬の日 一具

如くを又入る樹のひやう 石外
能綱を飾り置のきみ丸 具

東田町の

ふよとま

海好のきょうれきうふきん 石外

角田川道途

秋事ゆきと暮らしてはゆきと浮病を
見たりと理の夕ぐれを女郎花 左

嘉永三戌秋

秋

